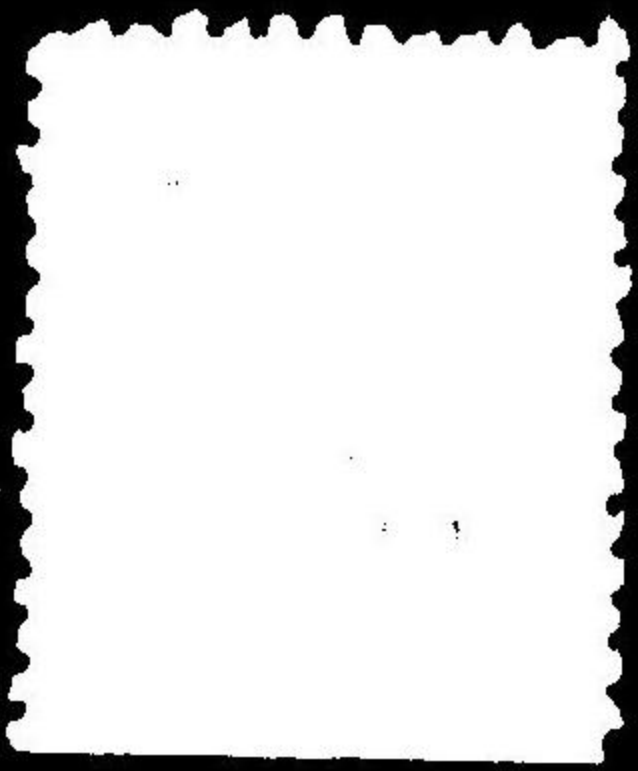
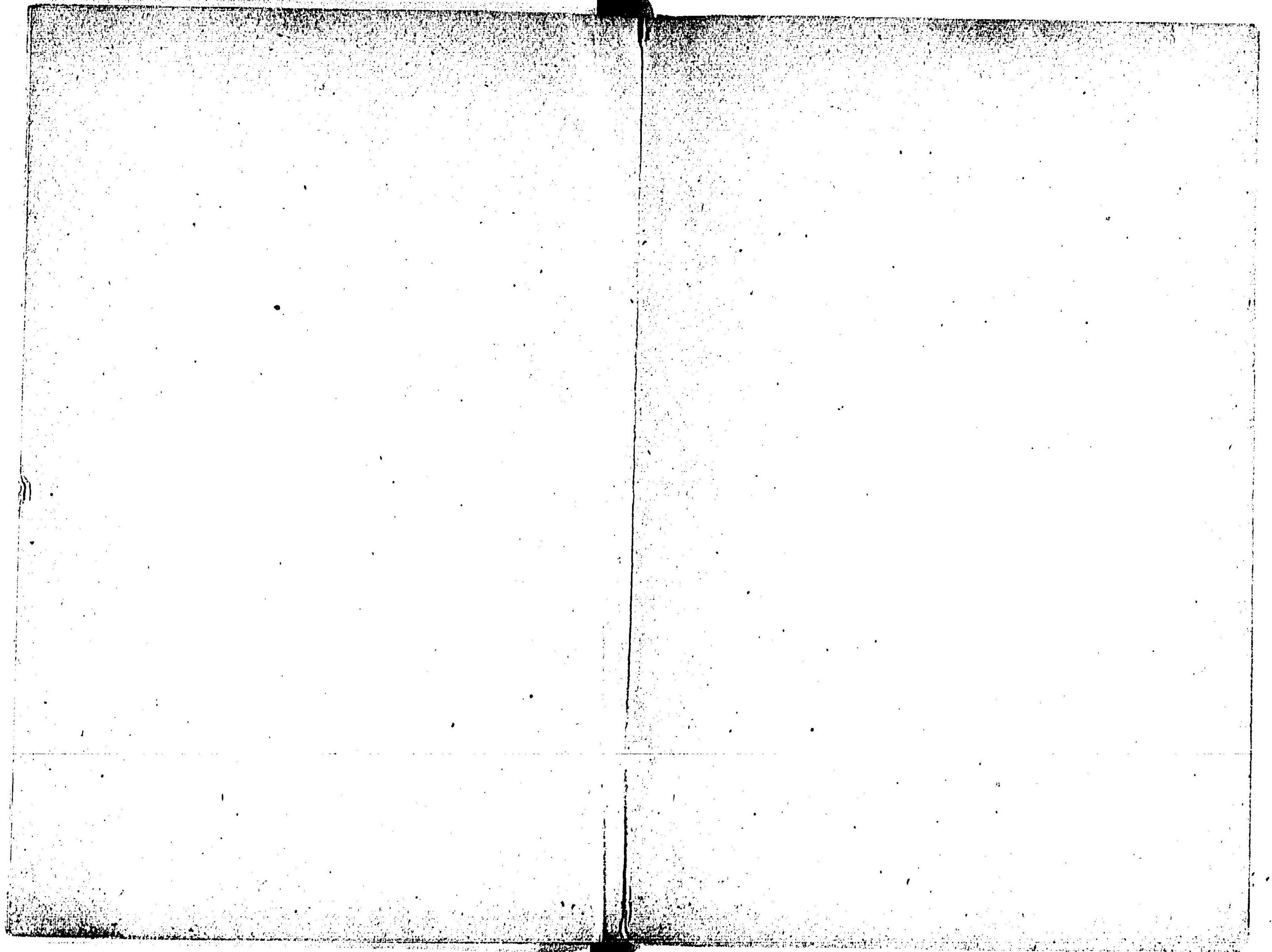


三
行
裝
範





序

弓術は武的遊戯の最たるものなり、野球、庭球、蹴球を遊ぶに比し余りに若かゝらぬ大人の好遊戯なり、費用のかゝる馬術に比べては至極安上りの遊戯なり、然も最高尙有趣味の遊戯たるを失はず。

茲に遊戯と呼ぶ、蓋飛行機の空馳ける世なればなり、頃者米國ジョルダン博士來朝

大野球
44.10.26

し帝都本通りの骨董店に我國古來の鎧兜を
見て曰く、武器の骨董化は世界平和の爲に
喜ぶ可きの現象なり、軍艦、重砲の骨董化も
近からんと。

武藝たりし弓術の遊戯も世界平和進歩の
表徴に非るか。

野 口 會 長

弓 術 教 範 目 次

第 一 章	緒 論	一
第 二 章	弓術の起源及流派	五
第 三 章	弓術修業者心得(其の一)	二〇
第 四 章	弓術の心身に及ぼす効果	二八
第 五 章	用具	三八
第 六 章	弓術獨習法	四四
第 七 章	弓術修業者心得(其の二)	五二
第 八 章	姿勢論	六七
第 九 章	足踏	七一

第十章	胴造	七四
第十一章	弓構	八〇
第十二章	打揚	八四
第十三章	引取	八八
第十四章	着眼	九一
第十五章	持ち	九八
第十六章	放れ	一〇三
第十七章	結論	一〇九

弓術教範目次終

弓術教範

山本 晉著

第一章 緒論

弓術とは、そも如何なるもの乎、そして如何にして射、如何にして中つるもの乎、之を教ふるものが是の弓術教範である。

著者が此の書に筆を染めんとしたる時、論者あり非難して曰ふ、弓矢物具操つて戦陣に名乗り會うた昔ならば、いざ知らず、今の世は二十世紀ではない

乎、速射砲の世ではない乎、機關砲の世ではない乎、柔術の世ではない乎、國際間の戦争には銃砲が有利で、個人間の闘争には柔術が重寶がられて居るに、今更弓術教範の要何處にあると、論者の言に幾分の眞理は含まれて居る、されど弓術の要は、獨り戦争闘争にのみあらずして、又精神修養膽力養成の一法である以上は、世が如何に進み、國際の戦争に、個人の闘争に、如何程有利なる武器が發明され、如何程重寶なる術が案出されても、心身の鍛練修養と云ふ事が、社會に全く無用視されざる限りは、弓矢の道は、未來永劫を通じて、其の生命を失ふべきでない。

いのである。

夫れ誠心は射道の一義なりと云ふことがある、誠心ならんとするには、一切の妄想迷執を排除して、無念無想の妙境まで到達せねばならぬ、是を以て觀るも、射道即ち弓術が何如程、精神修養に効果を齎らすものたるかを知ることが出來よう。

然るに今の世の人は功利の念に急なるよりして、眼前に効果の歴然たる機關砲の有利なるを知るも、心靈の修養に與つて力ある、弓矢の道を忘れて居る、是れ物質的文明の然らしむる所ならむも、今にして其の矯正策を講せざれば、由々敗大事に至るまいか。

弓術が機關砲の行はるゝ今日に於ても、尙ほ學ぶに足るべきことは斯くの如くである、加之弓術はまた體育法としても、一種の強肺術としても、優に存在の價値あるものである。

然らば論者の非難は深く肯綮に中つたものでもなく、又余の弓術教範が全く無意義のものでなからう。

第二章 弓術の起源及流派

弓術の起源及び各流派、是は随分と六ヶ敷問題である、今一々に詮義立てをして、叙述してゆくならば、本書に數倍する尠然たる大冊となるであらう、併し其麼ことが、弓矢を手にする人に大した必要はない、さればとて一切其等に就いて知らぬと云ふことも、弓術を學ぶ人にとつて、恥しい思を與ふる事もあらうと慮つて、茲には一應知り置かねばならぬことのみを、簡単に説明することゝする。

今史を按んずるに、弓矢の濫觴は遠く遡つて、神代にあつたらしい、かけまくも畏き、天照大御神が素盞鳴尊と御盟約をなされたときに、珥をふられ給ふたことが書いてあるによつて、其事が判かる、是れが恐らく我國に於ける、弓の權輿であらう。

所が支那では、どうかと見るに、軒轅氏なる者あり、木に弦して弓となし、木を矯めて矢としたとある、軒轅氏なる者は三代以前の人であるから、少なくとも、三千年以上の古人だ、して見れば我國に弓ある以前に、既に弓矢が存在して居つたでもあらう。

さればとて、弓矢は支那から傳へられたものと解

するは、腐儒の癡言である、何んとなれば人文が、或る程度迄に發達すれば、鳥獸を捕ふるの具として槍とか弓とか、最初に考案されるのは、自然の數であるからである、さるを木に弦した弓すら考案することが出来ないで、之を支那に仰いたとする人は是れ我々の祖先を無智無能呼ばりするご一般、吾人の斷じて首肯し難きものである。

弓術の起源の事に關しては、極めて概略ではあるが、以上のことで、満足して、次に來るべき難題は各流派のことである、所が弓術は其の由り來る所が遼遠である丈、それ丈、各派簇出して、殆んど、其

煩に堪へん位である、依つて茲には古來人口に噂炙したるものゝみを識すことゝする。

一、神道流、

此流は神代の遺法を傳へたものであると謂ふ、從つて神道流と云ふ名稱も、詰り此處から起つたものである、また神皇の授け傳へられたものに法つて、毫も蠻夷の射方を摸倣しなかつた所からして日本流とも、言はれて居る。

一、鹿島流、

此流の開祖は、鹿島明神の禰宜の四郎某と謂ふ人で、遠く武甕槌命から、傳はり來つたものを、綜

合し取捨して、一流を成したとあるから、矢張り神道流の流を掬んだものであるが、自己が一流を開らき、それからして、逸見流、日置流、小笠原流などの生れ出たに見れば、此鹿島明神の禰宜四郎某は、實に今世射道流派の祖であるとも言へやう。

一、逸見流、

開祖は淺利與一義成の父である所の逸見清光で、射道を鹿島流の祖なる四郎某に學んで、竟に一家をなし、代々射道に就いて有名である、日置流、小笠原流など謂ふは是れより分れ出たものであ

る。

一、日置流、

開祖を日置彈正正次と云ふ、明應頃の人である、明應と言へは、後土御門帝の世、將軍足利義澄の時であるを以て、時代は左程に古くない、正次は剃髪してから後を、威徳軒とも瑠璃光坊とも云ふた、大和に住んだ所からして世に、此流を稱して大和流とも謂ふ、その日置流と稱するのは、後世此流を傳へた人々の呼びならはしたのに基くのであらう、正次は本邦射道中興の祖と云はる、程に斯術に關しては、蘊蓄が深かつた、されば此流か

らして、又幾多の流派が分れ出た、後に記する所吉田流、出雲派、雲荷派、竹林派、壽徳派、道雪派、左近派、印齊派、大藏派、大心派、山科派、等は、皆此の日置流の傳統である、以つて如何に日置流が我國の弓術界に、感化を與へたかの一般を解することが出来よう。

一、小笠原流、

開祖を小笠原信濃守源貞宗と謂ふ、新羅三郎義光の後裔で、父を信濃守宗長と云ひ、また弓矢に堪能であつた、此流は日置流と共に、後世に於て尤も重んぜられた一こつである。

一、吉田流

此流の開祖は、江州佐々木の家族吉田上野介源重賢である、弓矢を日置彈正正次に學び、其の奥儀を極め、竟に吉田流の祖となる、世に吉田道寶として聞えし人、道寶とは重賢の號である。

一、出雲派

開祖は吉田出雲守源重高で、出雲守一鷗入道重政の嫡子、射術に達して、竟に一派を開らく。

一、雪荷派

出雲守重高の弟なる吉田六左衛門源重勝の開きし一流で、重勝は兄に劣らず弓矢に堪能の士であつ

た。

一、左近右衛門派

開祖を吉田左近右衛門源業茂と云ひ、出雲派の開祖重高の三男である、夙くより父に従つて、射術を學び、深く妙境に入つたものであると云ふ。

一、大藏派

此派も亦吉田家の作る所、開祖は吉田大藏茂氏で左近右衛門業茂の三男である、吉田家が代々弓術の家として、家門を汚なかつたのみならず、兄弟父子相率ゐて一派一流の開祖となつたのも不思議と言へば不思議ではない乎。

一、印西派、

開祖を吉田源八郎重氏と云うて、慶長頃の人である、號を一水軒印西（一本には印齊とあり）と呼んだ、印西派と言ひ印齊派と言ふは、是れから起つたのである。

一、竹林派、

石堂竹林如成の開くところ、竹林は重氏と同じく慶長頃の人で弓矢の道を出雲派の開祖重高の父なる重政に學んで、衣鉢をつぐ、そして號を竹林坊と言うたところからして、竹林派なる名稱は出たのでたである。

一、大心派、

出雲派の開祖重高に従つて、斯術の妙を得た田中大心秀次が此派の開祖である。

一、壽徳派、

開祖を木村壽徳と云ふ、壽徳は江州野田の人、吉田出雲守重綱に従つて射術を習ひ、竟に大成して一派をなしたのである。

一、道雲派、

此派は伴喜左衛門一安の開いたもの、伴一安はかの吉田雪荷入道に従つて射術を習うたもの、號を道雲と云うたところより、道雲派の名は起つた。

一、山科派、

城州山科の里に安祥寺と云ふのがある、茲に住んた人に片岡平右衛門家次と云ふ士があつた、所が此の片岡は射術に堪能なところから、一派を開いたとある、山科派が即ち是れである。

此の外にも、武田某の開いた武田流、徳大寺某の徳大寺流、安松左近の安松流、弓削彌六の弓削流、熊谷一夢の開いた一夢流等種々あるが、一流一派の開祖の姓名を暗記せばとて。射道の妙境に達するものでないからして、煩雜を避けて、開祖傳は茲に筆を留めることゝした。

弓術は其の由來の久しいもの丈あつて、諸流派が盛に興つて、殆んど歸一する所を失つた觀を呈するに至つたことは、上述の如くであるが、其か爲に、種々の聞書抄録やうのものが、師弟間に傳へられ、其の始めは、極めて簡潔であつたものも、其に譬喩や蛇足などが加はつて、屋上に屋を架し、學ぶ者をして適從する處に迷はしむる結果を招くやうになつて仕舞つた、是れ諸流派が確執して、各他流を凌駕せんと欲し、濫りに題目を豊富にして、一人でも多く門弟を誘ふとした爲である。

世に五味、七道、五重、十文字、或は十二教、十

八界、二十五有など稱する、題目は即ち、是れである、而かも射道は其等があるが爲に、徒らに難解になつたのみで、少しも進歩の見るべきものは、無かつたのである。

古來の弓術書に、恰も禪宗坊子の問題やうのものを掲げてあるのも是れが爲である、今本書が其の聲に倣ふとせば、これ本書の生命を失ふものである、惟ふに今日の弓矢は、既に業に、其の兵器たる性質を失なふたものであるからして、今に及んで、種々の名稱の下に煩雜の法を説き、且各流各派の主張を一々に吟味したればとて、なんの必要もない、

依て本書は、能ふ丈名稱の煩雜を避け、及ぶ限り各流派を融和して、其の長を取り短を捨つることに努力したのである、されば古來の弓術書に見ゆるが如き濛朧なる字句、説明の一切を避けて、成るべく吾人が日常、目撃する事物を借り來つて説明の便に供し、又勤めて文字を平易にすることに意を用ひたのである。

第三章 弓術修業者心得（其の二）

是の心得は獨り弓術を修業する人にのみ限られたものでなく、所在武術に従事する人、又、所在職業に關與する人に取つても、必要であるからして、日常の心得と實地練習上の心得との二項に分つて説明すれば。

一、日常心得べき三戒

一、酒、色、を戒しめなければならぬこと

夫れ酒は其味如何に美であるとは云へ、畢竟する

醜藥である、能く謹儉の性を化して粗狂と爲す、と古人も言ふた如く、飲酒の習慣を作るときは、大概は謹直な人でも、粗暴な振舞を爲すやうになる、粗々かしく亂暴な人が、どうして能く的を狙ひ中つることが出來やう、色に於ても亦其の害毒は酒と同様である、第一に淫事をのみ事とする人に眞面目な考があるであらう乎、第二に淫事を事とする人は氣力を消耗することがないであらう乎、是の二つの疑問で、如何に色慾が人の活動を鈍くするかが解かる、氣力のない人に、どうして能く的を狙ひ中つることが出來やう、弓すら引きうる

やが第一あぶないではない乎。
然らば酒色共に、弓術を學ぶ人にとつては、大に戒しむべきであることが知れやう。

二、勝負事を戒しむること。

茲に勝負事と言ふのは、圍碁、將碁、骨牌、掛事の類を指すのである。人は誰しも勝たんことをば欲するが負けんことを希望する者はない、そこで勝負に負けると、今度こそは勝ふ勝ふと思ふ所からして自然に時間を費やすこととなるのみならず其に淫するの結果は諸事を放擲するまでも立ち到るものであるからして、従つて弓術を學ぶ人に

は障害になるとも、決して益はないのである。

三、油斷、怠慢を戒しむること。

業は勤むるに進み、怠たるに荒むことは、何業に拘らず眞理であるからして、弓術を修業するときばかりは例外であるとは言へぬ、又油斷は大敵と言ふことさへある、少しは自分の手が上つたと油斷すれば忽ち技は下がるものである、何んとなれば沈滞は腐敗し退歩するの始めであるからである。

二、實地修業上の心得。

一、無念無想、

弓術に達した人を見るに、何れも無念無想の境を

眼前に展開し得る人であつたやうである、そして古人は是の無念無想の妙境に到達するに、何等かの信仰に依頼つたのである、かの八島の合戦に那須與一宗高が、扇の的を射んとして、瞑目多時、「南無弓矢八幡大菩薩」と口に誦へて神明の加護を祈つたとあるも、實は是の無念無想の妙境を現出する爲であらう。

然るに茲に論者ありて「無念無想とは胸中一切無何有なることを言ふのではない乎、射る人には的に中てんとする一念なくてはならぬ故に、一念無想と謂ふべきである」と、是れ一を知つて二を知

らぬ人の論である、無念無想とは、一つの邪念も無く一つの邪想も無き境を謂ふので、的に中てよう中てようとする一念は、既に邪念となるのである、なんとすれば中てよう中てようとする結果は不知不識のうちに、凝り偏する傾を馴致して、中正なることを得ない爲である、中正を得ずして的に中てんとするは、木に縁つて魚を求めんとするより六ヶ敷ことである。

二、不凝不偏、

凡で弓術に限ぎらず、何業にても凝り偏すると云ふことは、邪道に陥るもとで、凝るとは固くなる

を謂ひ、偏するとは、中庸を逸するのを謂ふ、所
 が其の道に達せざる人は兎角に、凝り易く偏し易
 いものであるからして深く注意せねばならぬ、之
 を例ふるに、文字を書くにも、革まる際には、平
 生無造作に書くよりは下手に出来るなど言ふこと
 は、是の凝り偏した傾きがあるからである、弓術
 に於ては、其故に非常に是の凝ることゝ偏するこ
 とゝを忌むのである、一步の差も遠く行けば千里
 の違ひとなる格言の如くに、弓術に於ては、手許
 に一分のくるひが來ても、的場に行けば一間程の
 違ひとなるので、凝り偏して、中正を失うたなら

ば到底的を射中つることは不可能なのである。
 かく是の不凝不偏と云ふ事は弓術にとつて必要な
 条件であるのみならず、是れは又無念無想の妙
 境に到達するの道行であることを知らねばならぬ。
 三、不恐不侮、

的が餘りに小さいからとて恐らくは中るまいとて
 射ぬ前からして恐れ、的があんなに大いならば
 百發百中など、先づ侮つてかゝるものは、何れも
 先きに見込のある射手とはなることが出来ぬ。
 是れ恐れゝば固くなり易く、侮れば動作が粗慢に
 流るゝからである。

第四章 弓術の心身に及ぼす効果

余は前章に於て弓術の門に遊ぶ人の爲に、一應心得置かねばならぬ條々を論じた、而して今斯術の心身に及ぼす効果を論ぜねばならぬ次第とはなつた、所が弓術の心身に及ぼす効果と云ふたからとて別に取り立て、言ふ迄もなく、前章を讀まれた方々には大方推則がつくであらう、されど説かねばまた弓術の有難味が解らぬ節々がないでもない、依つて以下に、精神上に及ぼす効果と、肉體上に及ぼす効果と

を別々に分つて説明する。

一、弓術の精神上に及ぼす効果、

夫れ射は古へは六藝の一として、士君子の修めざる可らざるものであつた、士君子の尊ぶべきものは誠である、而るに射は是の誠を以て第一義とするのである、心誠ならざらんには射れども中たらず、誠は天の道なるのみならず、人の道、また射の道である。

不恐不侮と云ひ、不凝不偏と云ひ、無念無想と云ふも實は是の誠を得んが爲めの手段である、されば中庸にも

射有似乎君子 失諸正鵠 反求諸其身。

とあるは、射て的を逸した際には、己に顧みて、姿勢に邪な所は無かつた乎、心に邪な念は無かつたかと自省する點が、君子の行に似て居るとの意味である。

射はそれ斯くの如くに、人に反省して誠なれ、色に遠ざかつて誠なれ、勝負事を廢して誠なれ、酒、斷怠慢を戒しめて誠なれと教るものである。

それ人に是の誠あれば、人は不知不識の裡に、正義を重んずるに至るのである、公明正大に赴くのである、禮讓を行ふに至るのである、勇猛の氣にも富

むやうになるのである、道の爲には身命をも惜まざるに至るのである、加之射は法に従つて能く中つることを目的とするものなれば、法式に適ふて中たる迄は二十年が三十年なりとも、研究せねばならぬ、射は此點からしても、人に非常なる忍耐力と克己の力とを、冥々裡に教ふるものである。

以上は弓術か吾人の精神に及ぼす効果の大體論であるが、尙ほ古書に見えた、揚弓十徳なるものを掲げて見れば、

- 一、學ばずして禮讓を辨ふ、
- 二、禮らずして病患を除く、

三、貴からずして顯貴と交る、
 四、習はずして威儀を善くす、
 五、教らずして兵争を悟る、
 六、聽かずして曲直を察す、
 七、倦まずして他念無し、
 八、求めずして親友有り、
 九、熟せずして虚實を諳んず、
 十、試みずして強弱を知る、
 とある、如何に弓術が吾人の精神作用を鍛練するかは之を見たのみでも略ぼ想像がつく、然らば弓術の肉體上に及ぼす効果はどうか、是れが次に來る問題

ある。

二、弓術の肉體上に及ぼす効果

33 果効すば及に上體肉の術弓

世に運動法として價値あるものは實に澤山ある、曰く劍術、柔術、馬術、水泳、テニス、ボール、兵式體操、柔軟體操、と殆んど縷指するに違ない程である、其等に生命がある以上は、皆各獨特の長所があることを示すもので、今更、吾人の叟々を要せぬが、其等に關與する人の多くが、我田引水の論を敢てして、我佛のみ獨尊きやう、言葉巧みに述ぶるのは詢に沙汰の限りではないか。

物には必ず一利一害がある、是れぞ完全な運動法

であると言張するも、或る方面から見れば、何んぞ知らん決して完全と言へぬことがある、例へば柔術である、成る程柔術は四肢五體を偏頗なく運動せしむる點から言へば、大に完全に近いものであらう、併しまた一方から考へて見れば、柔術は剛健なる身體を持って居る人にこそ適すれ、少しでも腦とか肺とかに疾患のある人には寧ろ過激に失する嫌があるではないか。

然らば弓術は、どう乎と言へば腰部以下を餘り運動せしめぬ所からして考へたならば、無論偏頗な運動法であらう、然れども弓術で足を働かせぬからと

言ふて、足部が弓術を習た爲に、却つて委縮して仕舞ふたと言ふ話も聞かぬではないか、よしや其點に於ては缺點があらうとも、他の點に於て償ふて餘あれはよいではないか。

着よ柔術劍術は相手なくしては出来ないではない乎、泳泳として春夏秋冬隨時に出来るものでない、然らば、是等は隨時の運動法としては適せぬ所がある吾が弓術は此方面に於て大に誇ることが出来やう、何んとなれば弓術は相手なしに、隨時に楽しむことが出来るからである。

弓術はまた腰部以下を働せぬ偏頗の運動法なりと

非難する人あるも、其等の人には多く耳を貸す必要はないのである、夫れ人體の最大肝要の部分は多くは腰部以上にある。

腰部以上に穩健なる運動を與ふることは、或る格段なる病者を除く外は、誰人にとつても必要なる條件であつて、例外を見ないのである。

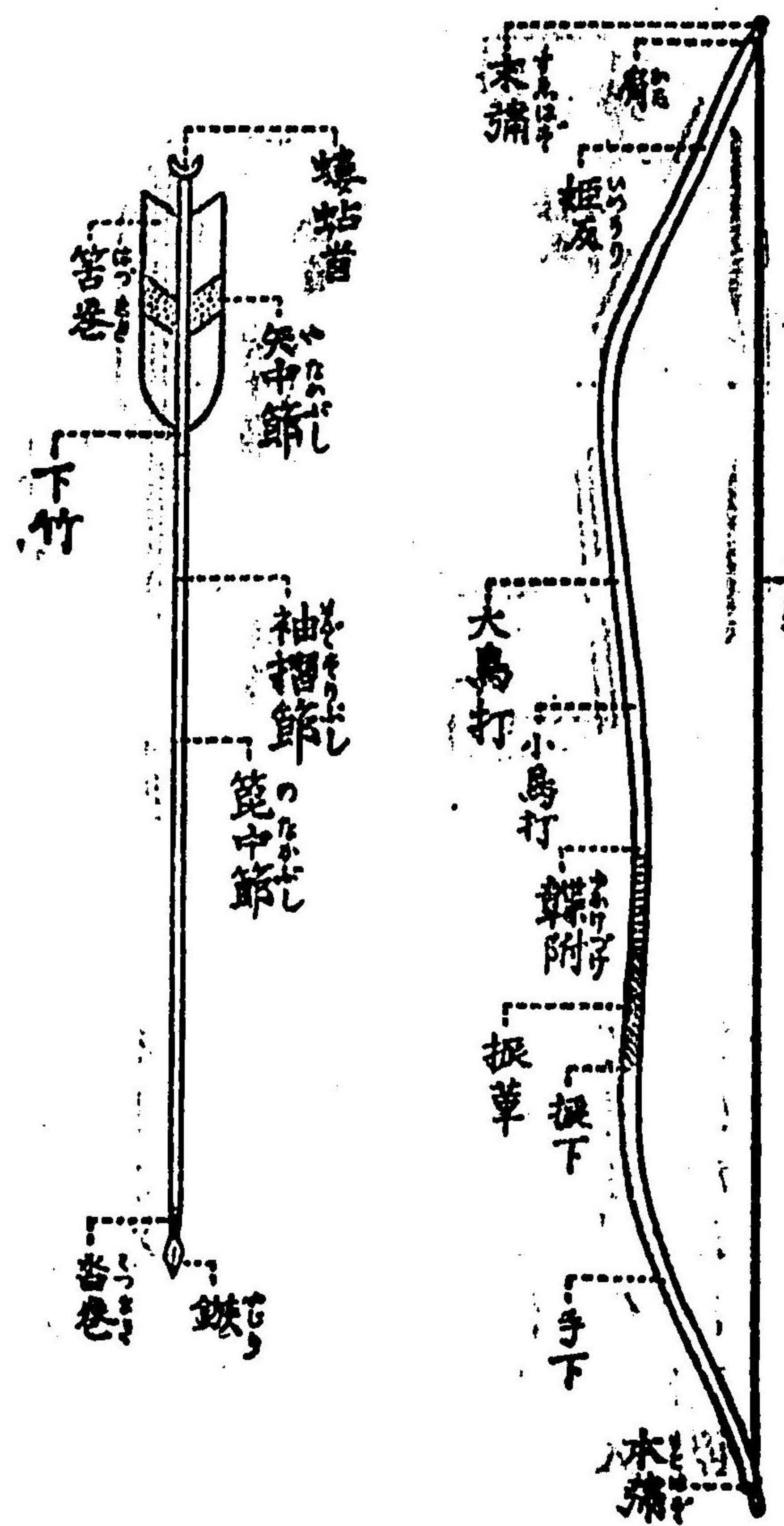
是の故に弓術は壯者によく老者によく女子に適し小兒にも亦適するのである、豈に斯の如く隱健にして而も妥當なる運動法は、弓術を措て他に見出すことが出来ようか。

加之、胸隔を開く點に於て、他に弓術に比儔すべ

き運動法があるであらうか、弓を滿月の如くに引絞つた時は、諸君の胸隔は殆んど極度に開展された時間で、ハツシと射たときは、諸君の胸隔が殆んど極度に押し縮んだ時ではない乎、横膈膜は其の都度上下動を爲して、腹内の諸機關、一切合切を適度に揺つて、其に穩やかな運動を與ふるではない乎。

是れが爲に、輕微なる諸疾患は、旬日にして癒へて仕舞ふ、肺病患者が日課の如く行ふ深呼吸とか腹式呼吸とか稱するものも弓術の是の徳に比すれば、無趣味なる點に於て、遙かに劣ると言はねばならぬ以上は弓術の肉體上に及ぼす効果の一般である。

矢 弓 圖 一 第

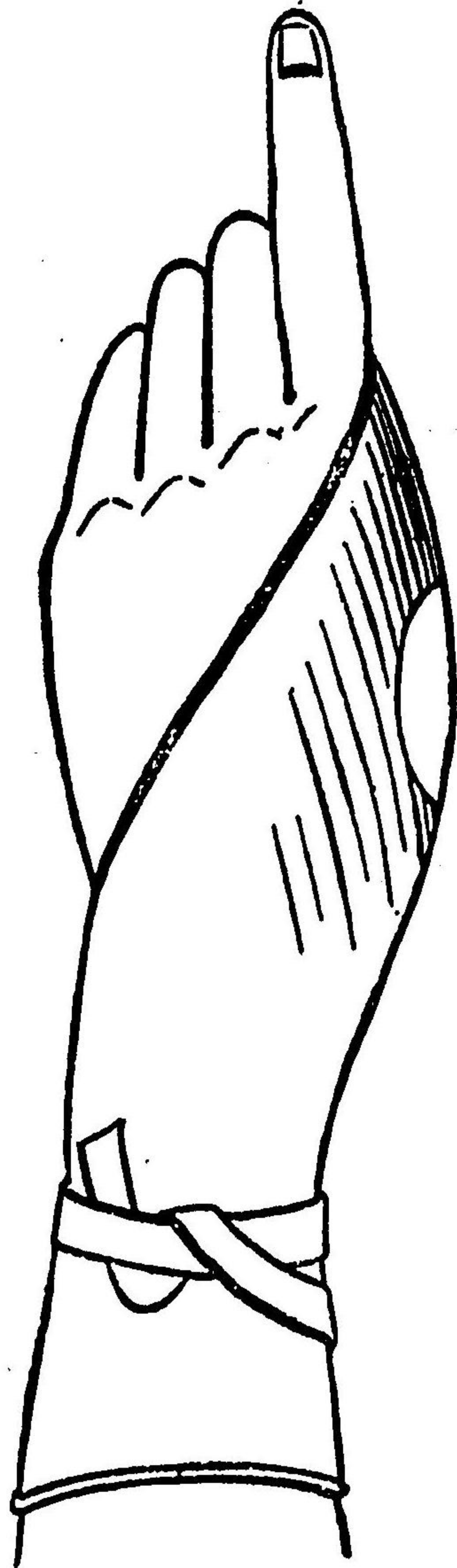


ある。
 命弓矢の形體、名稱を圖で示せば左の如きもので

第五章 用具

稱、茲に用具なる題下に説く所のものは、形體及び名
 稱の一般であつて、其の製法如何を論ずるものな
 い事を豫め注意して、賞いたし、何んとなれば、よし
 や製法如何を論ずるとも、要するに無意義に終つて
 仕舞つて、素人が作製したれば到底物のやうに
 立たぬ爲である、然れども素人なればと心得置か
 ねばならぬ事あるに際しては、其箇處々に於て簡
 単に説明あることもあつて、其の箇處々に於て簡

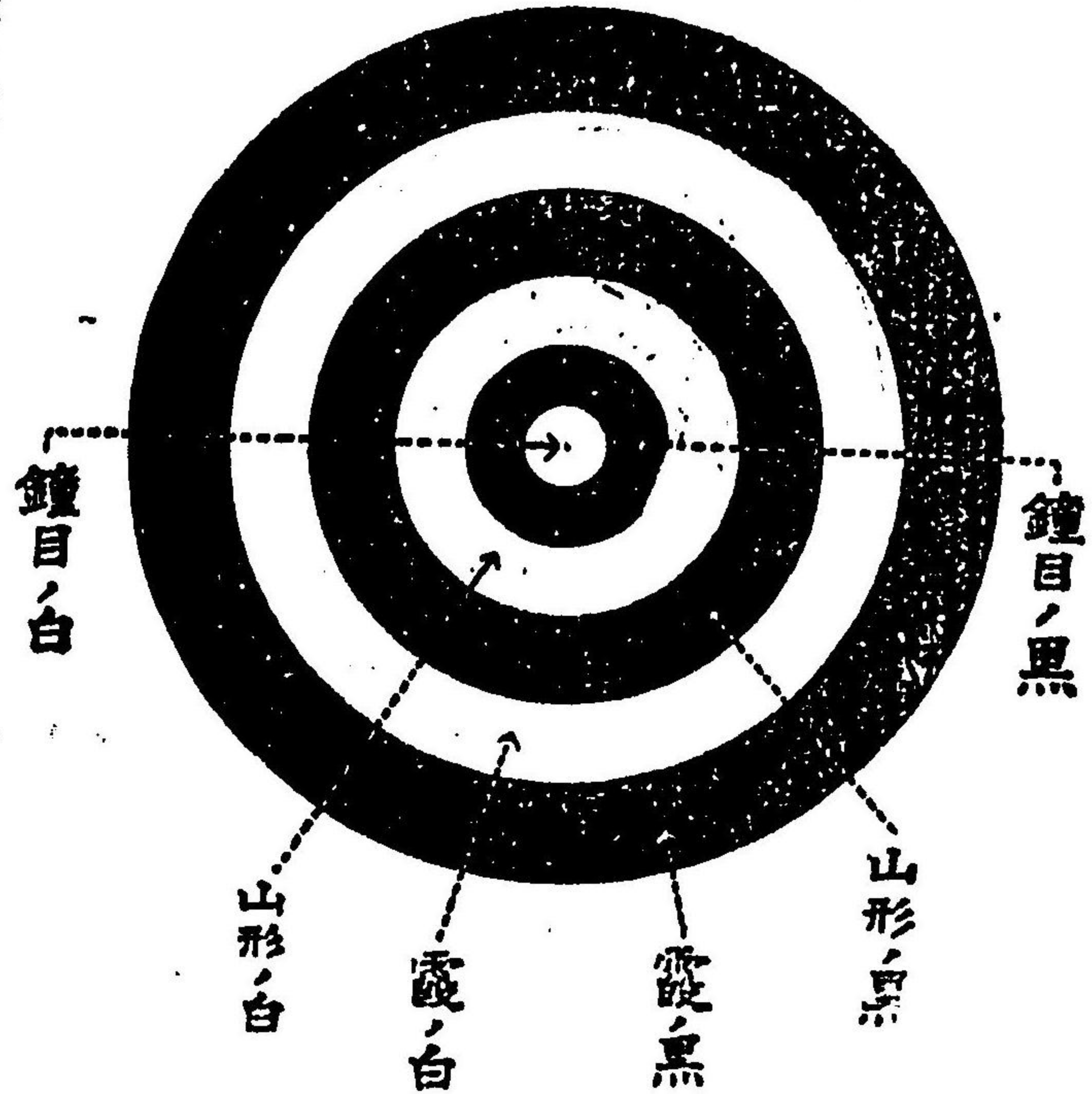
扇子形のやうなものもあるが、圖は一切略することとした。



第三圖 押手の様

三十間乃至、五十間とするのである、此外にも小的金銀小的等あつて、形體も一樣でなく時には菱形、

圖 の 的 圖 二 第



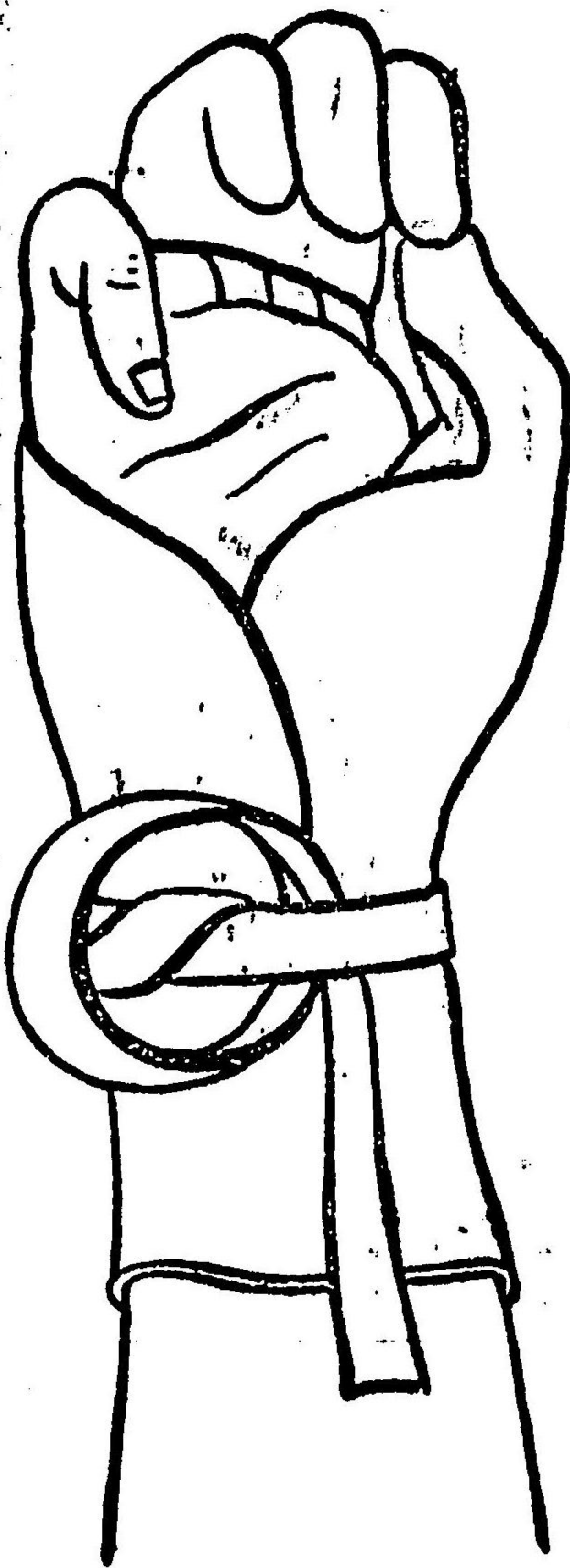
概熟練した上の事で、さうなると距離も従つて遠く

上圖は皆人の知るところの圓的を示したものであつて、曲尺にて直径一尺二寸あるを通常として居る、併し大的になるると直径六尺位のものもある、是れは大

押し掛とも謂ふのである。
 紐の締め方は、第三圖押し掛になつては、圖の如く腕の外側に挟み締め、第四圖勝手掛にあつては、勝手の脈所の側に挟み締むるのである。

第三圖、第四圖は共に鞆を左右両手に掛けたものを示したものである、茲に注意すべき事は、弓術で

第四圖 勝手の鞆



は、左手を押し掛と云ひ、右手を勝手と云ふことである、故に第三圖に示した鞆は左手に掛ける所から又

第六章 弓術獨習法

弓術は柔術や劍術とは異なつて、相手を見出し得ねば決して出来ぬと言ふ不便は寸毫もない、弓と矢すらあれば的は必しも要しない、樹に中て、堤を射鳥を狙ふても、慰み半分には出来る。

然れども能く言ふことであるが、中つるのばかりが弓術の生命でない、射の生命は誠心ならんとする所にある、苟くも弓術を學ぶ位ならば、是の境に到達する覺悟がなくてはならぬ、して見れば、射も亦

道樂半分にしては駄目である、由是觀之、弓術を獨習するには、並大低の心掛けではいけないのである。

然らば、どうして弓術は獨習が出来る乎と言ふに善良なる教授書を得、其を良師とも仰いで、善く教授書の言に聞き、苟しくも違はざらんことに苦慮せねばならぬ、弓術は其の由來が尙しひだけあつて格式も亦極めて面倒である、善良なる教授書は必ず是の格式を教ふることが忠實である、格式法則を無視しては、能く中てたからとて、到底射道の奥儀に入つた者と稱することは出来ぬされば、弓術を獨りで修めて、其の奥堂までをも窺ふとする人は、是非と

も善良なる教授書に就いて、姿勢の事、着眼の事、
 發射の法などを心得置かねばならぬのである、然ら
 ざれば、技は崩れて、眞技を會得することは、不可
 能になつて仕舞ふ、是れは禪をやりそこねて、野狐
 禪となるのと何も違ふたことはない。
 其故に善良なる教授書を手にする事が出来た人
 は、技を磨く爲に、忍耐して油断なく練習を續行せ
 んければならば、良師に就いたからとて、是の事は
 一つで、怠けて居て其道に達した人は古來ないので
 ある。

以上の準備と覺悟がついたなら、獨習者（是れは

獨り獨習者に限らず、師についた人でもさうである
 が）は卷藁に射込ことから習はねばならぬ。
 卷藁を射ることは、決して的を射る如くに、興味
 あるものでない、然れども初學者は是非とも姿勢を
 整ふる爲に、是の卷藁を射ることを充分にせんけれ
 ばならぬ、弓術に於ける卷藁の射法は、例へば家屋
 に於ける土臺と同じものであるからして、之れは是
 非とも最初に於いて固めて置かねばならぬのである。
 さうしたならば、姿勢も整うて弓術の基礎がなりあ
 がるのである。

若し初學者が、卷藁を射ることを嫌ふて、最初か

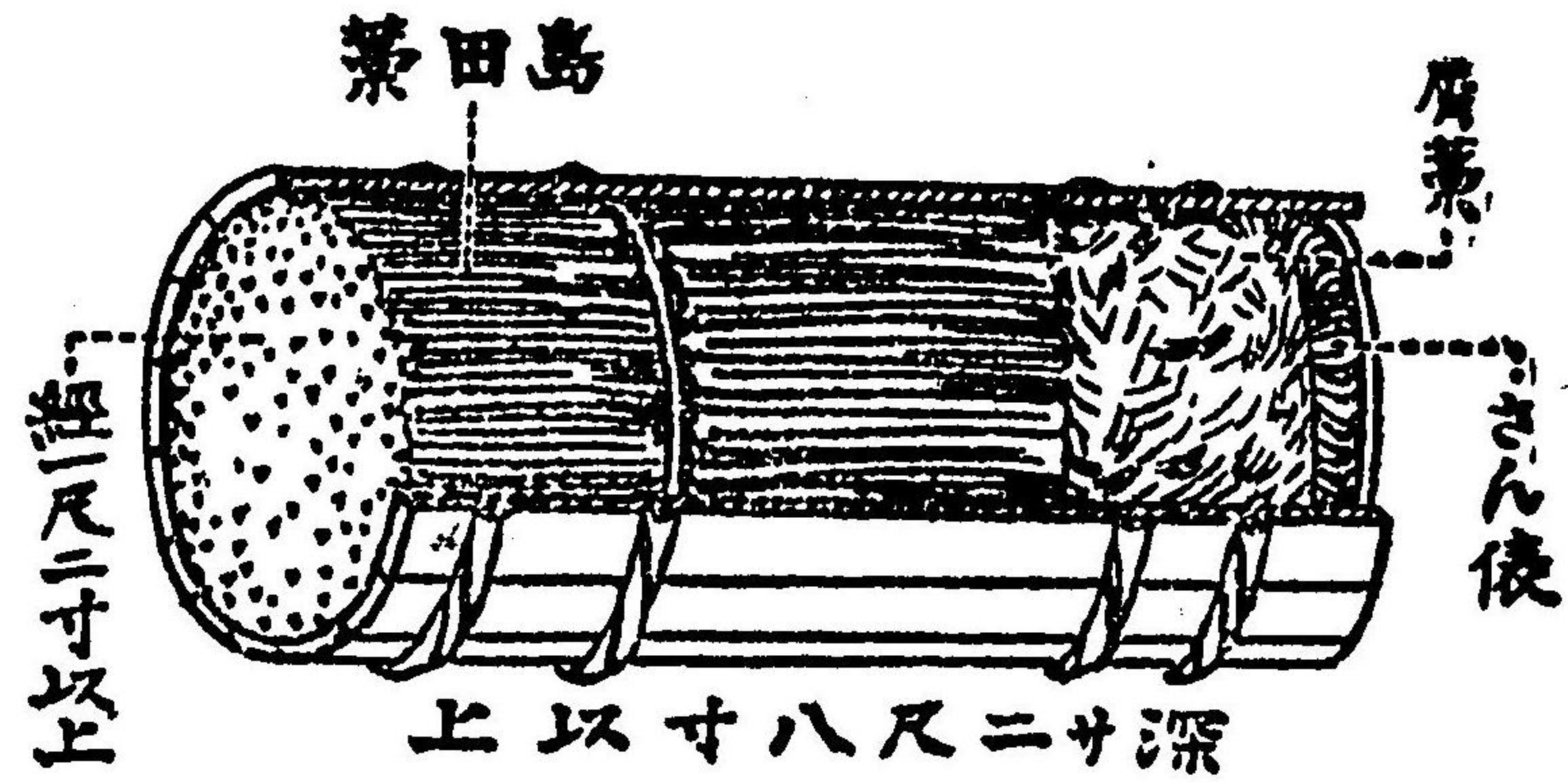
ら的に向ふとしたならば、其の結果はどうであらう
 夫れ弓矢を、オツとりて的に向かへば、唯だ中心に
 のみ中てむことを希望するは、初學者の常であつて
 姿勢如何と顧みる者は、殆んど皆無と言ふて差支ひ
 ない、然るに弓術は甚だしく之を忌む、何んとなれ
 ば、姿勢を整へずして中むことを希望するは、砂上
 に高樓を築かんとするの愚を演ずる類であるからで
 ある。

否々、豈に、番に其れのみ止まらんやである、
 若しかゝる病弊を放任して敢へて艾除策を講ぜざる
 に於ては、竟には癒すべからざる痼疾となり畢るの

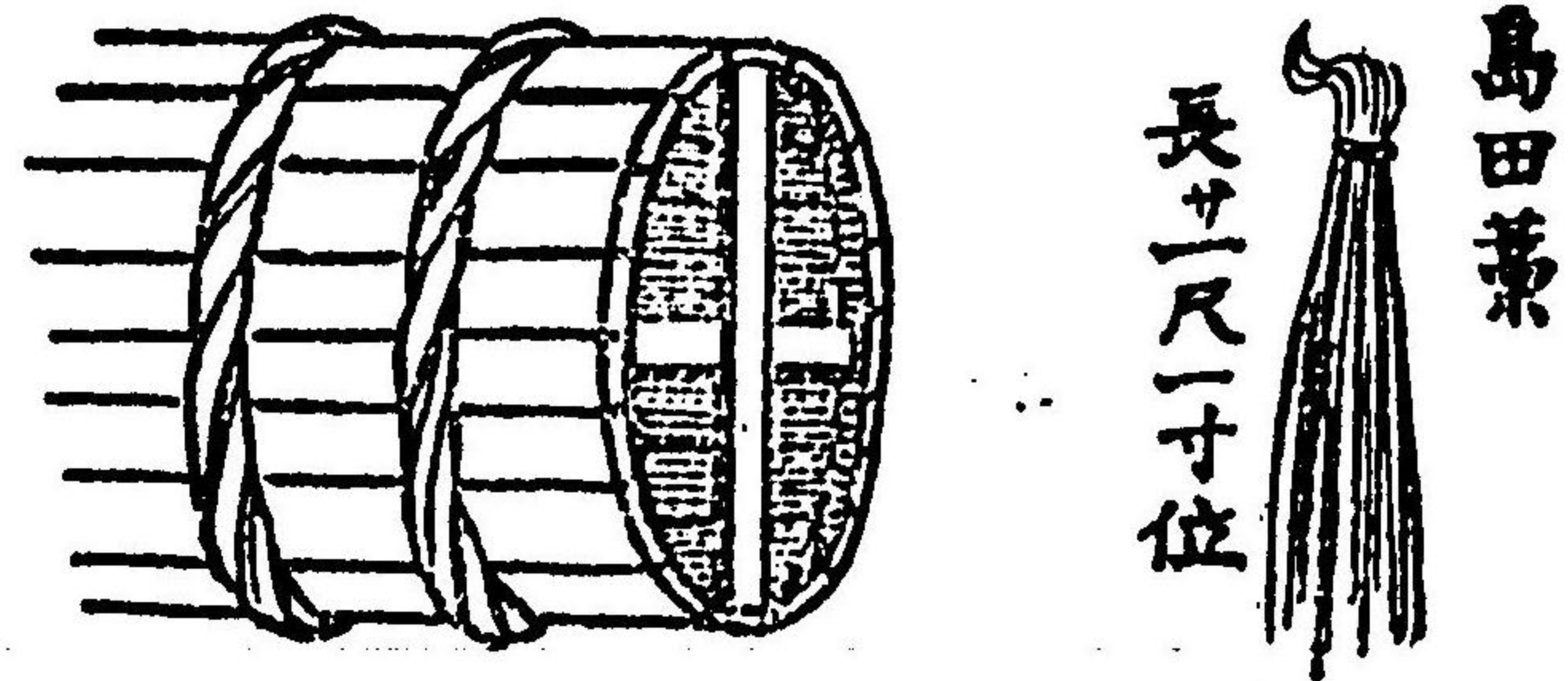
である、其故に初學者に巻藁を射んことを奨むるは
 斯かる病弊の感染を未然に防ぐ爲である。
 然らば其の巻藁とはどんなもの乎、是れ弓術を獨
 習せんとする人の必ず一應は心得おかねばならぬこ
 とである。

先づ順序として、巻藁は、どんな風な仕組である
 かを説明するに、第五圖の如く、桶に、さん俵を敷
 き、其上に島田藁の刈屑を柔かに詰め、其上に圖に
 示した如く、島田藁を長さ一尺一寸位宛にして二段
 に柔かに詰めるのである、最初は斯く柔かに詰め置
 くも巻藁は矢を射込に従つて、次第に堅くなるので

第五圖 卷葉縱斷圖



桶底圖



ある。

以上は弓術獨習者の最も留意すべき點を示したるものであるが、總して初學のうちには他人の稽古を絶えず注意して、其の善く射る者に倣ひ、悪しく射る者の悪癖に鑑みて、己も其の弊竇に陥らぬ考が必要である、論語に「三人行へば必ず我師あり、我は其善なる者を選んで之に従ひ、其不善なる者にして之を改む」とあるは、此邊の事を言ふたのである。

故に初學者は、三人行へば必ず我師ありてふ事を牢記して他人の稽古に周匝なる注意を拂ひ、以て自ら發明する覺悟があらねばならぬのである。

第七章 弓術修業者心得(其の二)

一、射所よりの場迄の距離のこと、射る所よりの場迄の距離は張りたる弓の長さを十五回回轉したる丈の距離を定法とするが、熟練の上は三十間又は五十間の距離にもすることがある。

二、甲矢、乙矢の事、

甲矢乙矢は又早矢、遅矢とも兄矢弟矢とも書くことあれど、總て同じ事である、今道雪流の説明の

解り易きをとれば、内向を早矢、外向を遅矢と謂ふて居る、矢に内向と云ふは、矢を弓に番ひて羽表が我身の方に向くを謂ひ、外向と云ふは羽表が我身の方でなく我を反對の方へ向いたのを謂ふのである、そして甲矢は始めに射、乙矢は次ぎに射べきものである、然し是等の區別は故實に拘泥する人の八釜敷謂ふ所で、弓術の精神に餘り關係のない禮式上の規定に過ぎないのである。

三、一手、二手と謂ふこと、

一手と謂ふは矢二本のことで、二手とは矢四本を謂ふのである、他は推て知られたし。

四、四矢のこと。

二手即ち矢數四本を四ツ矢と謂ふ。

五、弓に弦を掛け之を張るとき、

弓を張るときは、其下に人を置くは甚だ危険であるを以て是非とも避けねばならぬことである、されば弓張る下には辨慶も居らずと謂ふ諺もある位である。

六、見分者のこと、

射を爲すときは、見分者として矢の的に中たつた工合などを見分けて優劣を定むる人がある、其故かゝる際には射手は必ず此見分者に敬禮せねばならぬ規定となつて居る。

小的或は金銀小的を射る場合は是見分者より望まゝることあり、又射手より望むこともありて、一様には斷言することが出来ないものである。

七、射手四五人並び立ちたる場合のこと、

射手四五人並び立ちたる場合には、先づ第一位にある人の射放ちたるを見て、第二位にある人が射るのである、それが濟めば第三位第四位と順次に始むるものである。

此時貴人の見分あれば、一列は甲矢を射次に一列は乙矢を射るのである、そして甲矢乙矢を共に射

はなちたれば、見分者を前に見て五足後へ退き、次に又一手を射れば進みて射所へ直り、前に一手を射たるごとくし、五人射て仕舞ふたならば、五足引きて跪き弓を左に持ち弦を我方に向け、禮を爲して退くのである。

八、肩をぬぐこと、

射るときは必ず左の肩をぬぐのである、寒きときはシャツやうの筒袖を下に着て肩をぬぐべく、又稠人衆坐の見る前なれば、肌膚を露すは忌むべきことなれば、假令夏なりともシャツの如きものを用ひるがよい。

九、矢の長さを計ること、

第六圖 矢丈を計る圖



矢の長さを計るには上圖の如く正面に向ひ左手を伸し自己の咽喉の中心より左手中指の尖端迄の長さを適當

とするのである。

十、弓のこと、

(イ)初學者は最初は五分内外の弱弓にて稽古するを

善しとする、始めより強弓を引くは右肩を甚だしく低落せしめてよくないのである、一躰初學者の弊は兎角に右肩が落ちるにあるが、強弓を引くと益々其弊を助長せしむるからである。

(ロ)又初學者は弓矢共に鈍きを用ひて、汗ぬたるを避くるやうにするが宜い、是れ汗えたる弓矢は手答へ荒々しくして極めて御し難い爲である。

(ハ)炎天に弓を持ち來たつたときは、暫く之を休すませ置きたる後に弦を張るのを宜しとする、斯くするは鏢洋き等を避くる爲である。

(三)弓を張る時は左手に力を込めて、弓の振り返さ

んとするのを押すはよくない、唯だ左手は全く扣へ抗のやうに心得て、右手にて専ら之を抱へ上ぐるがよい。

(ホ)弓を弦に掛け了りたるときは、末弭から元弭まで、一度手にて弦をこぎ下ぐべし、偕て弦打の時は、射手は弦を拇指と食指に宛て之を試みるがよい。

(ト)弦を張りたる後は、索引とて矢を番へずして先づ弓を引き試みるがよい、是れは弓に異狀あるかなきかを檢する爲である。

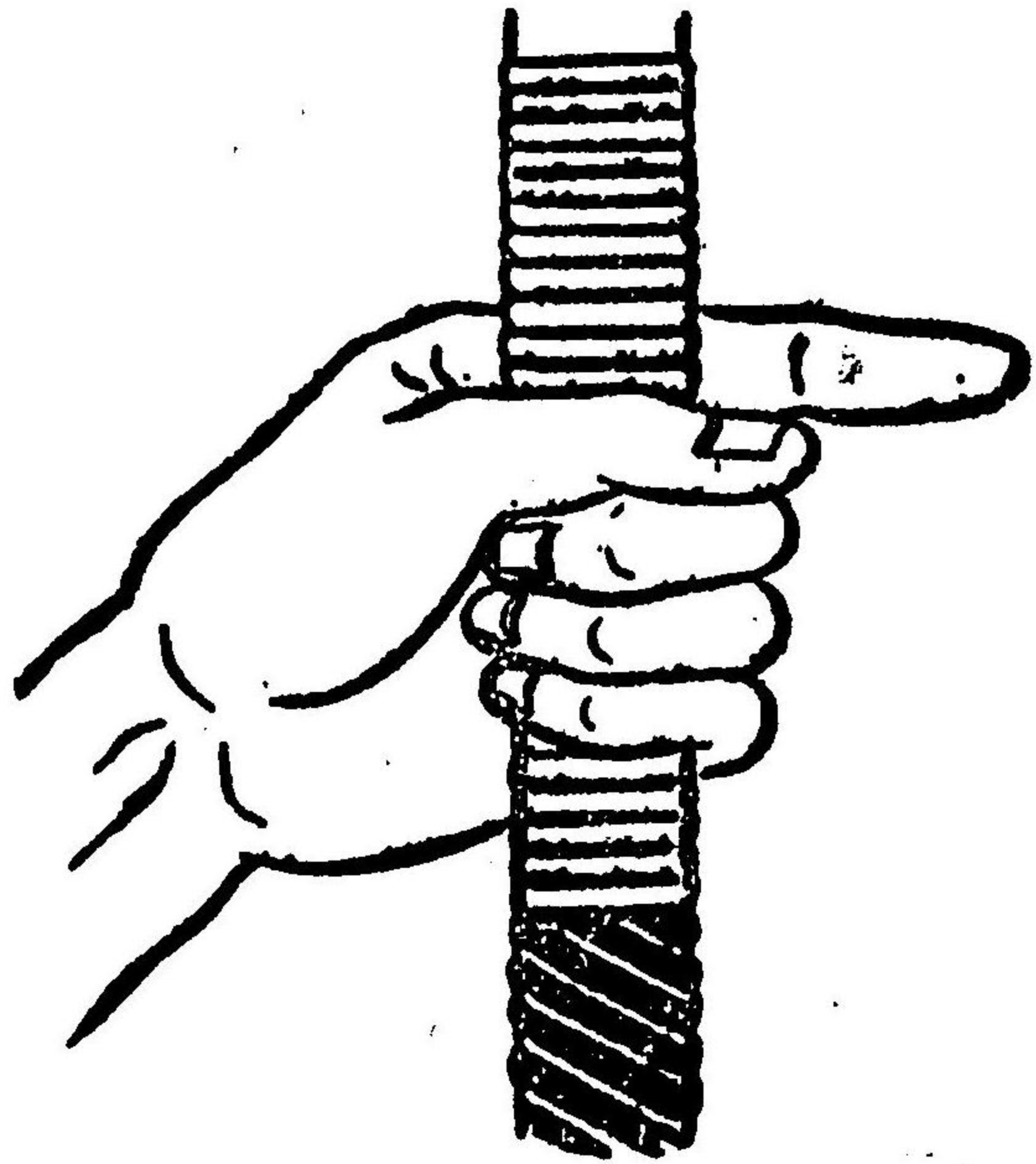
(チ)新弓は矢數を掛くるに従がつて、其弓の形狀が

換はるものであれば、其の弱き所は扶すけ、強き所は足にて踏み弱めるがよいのである、然かせざるときは強き箇所は益々強く、弱き箇所は益々弱くなるからである。

十一、鞞のこと、

鞞は初學の人は帽子の柔かなるものを用ひるがよ
く、上進するに従つて漸次堅帽子のものに換ゆる
べきである、帽子の柔かなるは放力なく、弓強け
れば、矢數を重ねるに従つて拇指に痛を生ずるが
初學者のうちには、強ひて強弓を引く必要なければ
先づ柔かき帽子の鞞を選ぶがよい。

圖のうやり握の手押 圖七第



十二、押手握りやうのこと、

押手 (左手) の握りやうが極く肝腎であるからと

て弓を握るに先づ
弓を膝頭に横たへ、
茲にて充分に弓を
虎口 (拇指と人指
との間) に押しあ
て、それから弓を
高く打ち揚げて、
的を狙ふとする人
がある、此の法は手の内が早く出来あがりて、初

學者を納得せしむるには便利でもあらうが、かくては手の内が凝り固り易くして、畢竟弓術を大成せしむる所以でない。

そこで先づ、弓を握るには、始めは酷くそつと握り、恰も掌中に一個の卵子でも握るやうにする、それから弓を高く打揚げ、それが済んで今度は弦を引取る段になるに及んで、弓を拇指の股即ち虎口にあて、左の腋下の筋を伸ばすときに、拇指の先に力を入れ、氣が充分に満ちた時分に、拇指をそらし、食指と拇指とを敏速に握り換ゆるのである、かくするも弓には少しの變化反動の起ころぬ

やうにするがまた肝要である。

そして弓を引き絞るときには、力は肩から發して二の腕に注ぎ夫れより小指、小指より無名指、無名指より拇指と順次に力を傳へて拇指に至るのである。

十三、勝手の弦をとる際の注意、

勝手（右手）の方と押手（左手）と同じく、初めより力を入ることなく、弦を引くには只専ら小指を以てし、無名指は軽く拇指の頭を壓へて、弦の放れざるやうにし、中指と食指とは、僅かに拇指の上に並べ置くに過ぎぬ。

矢が放たれてからは、拇指は自然に立ち、其手の放るゝには、恰も肩より糸にて引かるゝ如くするのである。

十四、規ひの心得及び高低の事、

射手は弓を打起し引く際に、狙ひは先づ的上縁から除々との中心に押上ぐるやうにし、初めよりの中心へ鏃を向けるのは善くはないのである。又矢の的を越ゆる人は、足踏を狭め、頭を少し右に仰向け、矢筈の番ひを上げ左手の小指を締るがよく、又矢の常下り勝なる人は之に反し足踏を廣くし頭を左方に屈め矢筈の番ひを少し常の所より

は下げ左手の中指を締めるがよいのである。

十五、的のこご、

平素射る的は一尺二寸或は八寸、六寸を限度とする是より以下の小的を射るのは宜ろしくない、何んとなれば小的は的中の慾心のみをつのらせ、技伸びずして、心膽も従つて小弱となるからである然るに一利一害は伴なふもので大的は技を伸ばすには至極よいが、大的は例へて技が不十分ながらも、鏃の規ひが的に入り易い爲め、規ひを慎重にすることを忘れて漠然と射る悪癖を助長せしむる弊がある、故に大的ですら射外すことゝなる、されば

大的を射る人は、心を小にして鐘目の真中を克く狙ひ、永く保ちて射るがよいのである。前言ふた如く小的は氣詰り技縮み、容易に的の鐘目の星に規ひの入りがたきものであるからして、調子永きに失して、術盡き射損ずることが多い、故に的の外一尺許りの無形の的を心に描き、其的に對する心持にて射ることが肝腎である。

第八章 姿勢

余は以上の數章に於て、縷々數千言を費やし、弓術を學ぶ人々の豫じめ心得置かねばならぬ條々を講述了つた、そして是れよりぞ弓術にとつての眼目とも言ふべき重要な姿勢篇に筆を染むるの段とはなつた。

夫れ姿勢は弓術の根諦である、苟くも姿勢に無頓着にして、唯だ中てむことにのみ焦慮する者は、土臺を築かずして家屋を建てんと企つる者である、尙

ほ之を譬ふれば、花園に雑草の種子を播布しつゝある者である、其故に早く之を除去し盡さずして久しきに亘つて放任し置かば、宿根蔓延したる曉には、到底艾除し難く、却て多年已が培かひし美華をして枯死せしむるの愚を演ずる者となる。

弓術に於て、姿勢を無頓着にする結果は、如上の比喩にも似たる弊害を生じて、再び癒やす可らざるの破目を來たすことがある、かの弓術の師範は門弟子の一舉手、一投足にも干渉して、只管法に違はざらんことを努むるは、全く是が爲である。

姿勢の弓術に及ぼす影響如何は、大方斯くの如き

ものであるが、姿勢の兎角を論ずるのは、獨り弓術にのみ限つたものでないのである。

看よ柔術にせよ、劍術にせよ、銃鎗にせよ、馬術にせよ殆んど所在武術と云ふ武術は、皆一様に姿勢の忽諸に附すべからざるを論じて居るではないか、是れたまゝ、姿勢如何によりては如何に術其者に達するも、畢竟素人離れのせぬものをして、識者の笑を買ふ所以となる事を證明して居るのである。

所在武術に姿勢の忽かせにすべからざるは上述の如くであるが、唯だ異なる所は、武術の性質上、其姿勢の取り方に多少の變化ある點である、其故に柔

術には柔術固有の姿勢あり、劍術には劍術固有の姿勢の取り方あるは勿論の事である。然らば弓術に於ては如何なる姿勢を取り、如何なる點に於て特に留意すべきか、諸君は以下順次説く所の諸章に於て、恐らく弓術獨特の姿勢を見出すことであらう。

第九章 足 踏

弓矢を持つて的に向ひ、射んとする人は、先づ足の踏み方を研究せねばならぬ、今その踏み方を説明するに、兩足を揃へて自然の儘に直立したる際なれば、先づ左足を一尺程前に出す、そして右足を矢束即ち矢の長さ丈け斜め横に開らく、茲に矢束だけの距離に兩足を踏み開らくといふのは、左足の大指即ち親指又は拇指と右足の大指との間隔を矢の長さ丈けにせよとのことである、斯くすれば左右の兩足は

丁度八文字となる。
 多くの弓術書に足は八文字に踏むべし、とあるは
 是の事を云ふのである。

斯くして後は的の中心と左足の
 大指と相對するやうにせんければならぬ、かく兩足の位置が定まつた
 ならば射る人は、兩足を確と土に踏み付けて、浮く
 ことのないやうにするが肝要である、そして其際は
 飽く迄も脛の筋を引き伸ばし、膝の關節を後方につ
 き出すやうにする。

然るに人によると、かゝる風に足踏をするも思ふ
 通りに左の肩の出ぬ人がある、さう云ふ人は右足を

通常よりも四五寸程後の方を踏むがよい、但肩の直
 り次第に足踏みも少しづつ、直して行くべきである。
 又或る人によると、今度は右肩の方が餘り、引込
 過ぎて、おまけに身の捻れた人がある、さういふ人
 は前の人とは反對に右足を通常の人より踏み開らくよ
 り四五寸前に置く方が宜いのである、尤も是を右肩
 の直り次第、少しづつ、足踏みを直すべきは當然であ
 る。

第十章 胴造

古書を見ると、是の胴造は随分六ヶ敷説れて居る例へば、胴造をするには、横一縦一に身を構へねばならぬとある。抑も横一とは、どんな風にすへきもの乎、縦一とは、どんな風に構ふべきもの乎、と云ふに、横一とは人體を横から見て一平面になること、押手即ち左手の腕首、肘、肩根、右の肩根、肘先が一直線になるを言ひ、縦一とは人體を豎から見た姿で、首根、胸、腹の中筋が一直線になるの言

ふのである。

そこで胴造をするには、左の腕首、肘、肩根などと右の肩根、肘とが一直線になり、且つ首根、胸、腹の中筋が又一直線になるやうに身構へねばならぬ。然るに初學の人に、かゝる風に身構へをなせと言ふと、兎角に體が固くなり過ぎて、技も碌に出来なくなる、射法啓蒙と言ふ書籍には、之を大に戒しめて、次のやうな事を言ふて居る、曰く
 初心の内は、兎角生硬と云ふて力む癖ありて窮屈なり、只和かに眞直にさへすれば、何時となく、そこくの締りもつき、自其役所々々へ出向ひ、

著者曰く其役所々々へ出向ひとあるは其の要所々々
 々に氣を配ることの出來る意ならん。力を作る形
 状なくして、身持安穩堅固に、總體の骨の番ひ締
 り合ひ、旋運悠長の味に至るなり、されども胴腰
 の極らぬ内は（中略）身法崩れ易く、兎角是より
 矢道の禍を引出すことあれば、能く心を用ひ、常
 に稽古すべし。

明らかき心の宿る胴なれば

體の直ぐこそこのまほしけれ

扱て胴を造りたる上にて、氣を臍下に鎮め、息を
 張るべし、斯くせざれば、勢伸びず、身内締りな

く、曲も病も生じ易し。

息を張るとは、息を詰ることにてはなし、氣を充
 たしむる事なり、（則ち）此氣は直ぐに發したる後
 の殘心まで貫通すれば、他念雜慮の限のかゝらぬ
 やうに、明らかき心の本を、臍輪（著者曰く丹田
 の事なり）へ束ねて末を散らさぬ事肝要也、所謂
 射は正心養氣を以て根本とすと云ふ味なり。
 足の踏様確と、胴の据り牢まらざれば、射様も矢
 宇も違ふものなり、譬へば根の太き木の枝葉少な
 きは、烈風大雨にも瘡れず、根の淺く入りたる木
 の繁茂したるは少しの風雨にも斃るゝが如し。

こあるに鑑みても胴造の呼吸が如何に六ヶ敷か、解からう。

今茲に注意迄に言ふべきことは、血氣の既に衰へた老人は兎角に前の如くの姿勢となり易すく、強て手に餘る強弓を射る人は之と反對に後にそり氣味となり、的にのみ氣を奪はれて中てんことをのみ焦せる人は左に偏し易すく、弱弓に重矢を番ひて射んとする人は兎角に右に片寄るやうになることである。斯る弊は、得て初學者にありがちのものであるが、大いに反省せんければならぬ。

胴造の磐石であることは、之を例へて見れば樹木の

の根幹のゆれ動きなきがやうなものである、一陣の風にだも堪へ得ぬ根幹であつたなら、枝葉も思ふ存分に繁茂することが出来ぬ如く、胴造にしてユラユラと動くうちは到底、押手勝手の働きも充分なる譯にはゆかぬ、其故に射手は堪えず人の胴造の仕方に注意するばかりでなく、又自己の胴造の仕方に就て他人の批評を求め、正しからぬ所あれば之が矯正に努力せんければならぬ。

第十一章 弓構

弓構は、足踏みを整へ、胴造り爲し了りて後、弓を目通りまで持ち來たりて、構ふる所作を言ふので體を正し心を落ちつくる爲めにする作法である。

されば其心得にてやれば善いのであるが、詳しく言へば、先づ弓に矢を番へ、押手、勝手を各弓矢に取り付けたる後、弓の下鉾即ち元弭を袴の中央にあて、右手を以て、一寸下腹を撫で軽く下腹に力を入れるのである。(第八圖参照)

是れは即ち柔術や劍術でも説く所の丹田集力法で心氣を臍下丹田に押込で、外物の刺戟に輕々しく動せぬ工夫である。

人は外部の刺戟を受けねば受けぬだけ、其精神状態は一時たりとも無事安穩で居られる、して見れば是の丹田集力法は一種の養氣法であるばかりでなく弓術にとつては極めて必要な秘術と言はねばならぬ、何んとなれば、心氣が毫末も亂れずして、安穩に狙ふことが出來るとすれば、是れ即ち射道に進むに缺く可らざることであればである。

射手は斯くして丹田集力法を行ふて、心氣を安靜

に保ち得たならば、次ぎには屹と的を見べきである
 そして其時には、弓は左肩と平行になるやうにする
 是れが自然の貌で、傍から見ても厭味のない弓構の
 仕方である。(第八圖参照)

第八圖 弓・構



第十二章 打揚

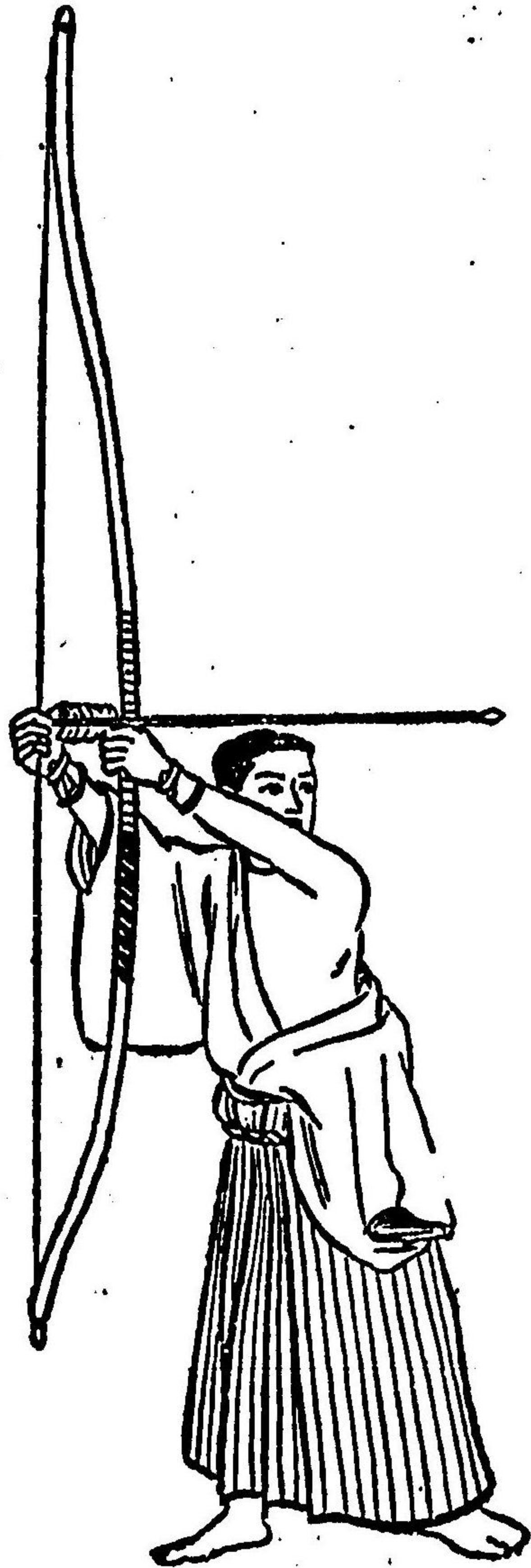
打揚は打上、打起とも言ふ、弓を我が面前に打揚ぐる事から、其名稱が起つたのである。

是の打揚を爲すには、第九圖にある如く先づ左の拳を目通りより少し高く揚げ、勝手は弦にかけたる儘、之に準じて押手より少し高め、靜かに兩手を的の方へ運び、矢を一尺餘り引くのである。(第九圖參照)

此時は的は二の腕の中心に對して、鏃は其的の左

にくるのである、之を中引と言ふのである、それか

第九圖 打揚



ら除々と、左右に弓を引き分くるのである。茲に注意すべきは、打揚を爲すには從容と迫ざる

やうにするが肝腎である、早くなく遅くなく、しなやかに打起すべしとは此事を言ふのである、故に打揚を爲すには左の歌の心持ちを持ってするがよい。

思ひきや、山ふところを、ゆたくと

影すみのぼる、弓張の月

月のゆたくと山懐に上るさまにも似べき風情で従容迫らず弓を打揚げねばならぬこと斯くの如くである。

然るに初學者のうちには、之の打揚を以て、單に體裁を装ふに過ぎずして、何等的中に關係のないもの、如くに信じて居る者がある、是れ大なる誤解で

あつて打揚の眞價を知らぬ者である。

抑此の打揚げの所作は、弓を引き絞つて放たんとするに至る第一の關門であつて、射る者は此際に須らく心を沈め氣を平かにして、力を下腹に注ぎ、所在忘想を排除して、無念無想の妙境を窺出せんと企てねばならぬのである。

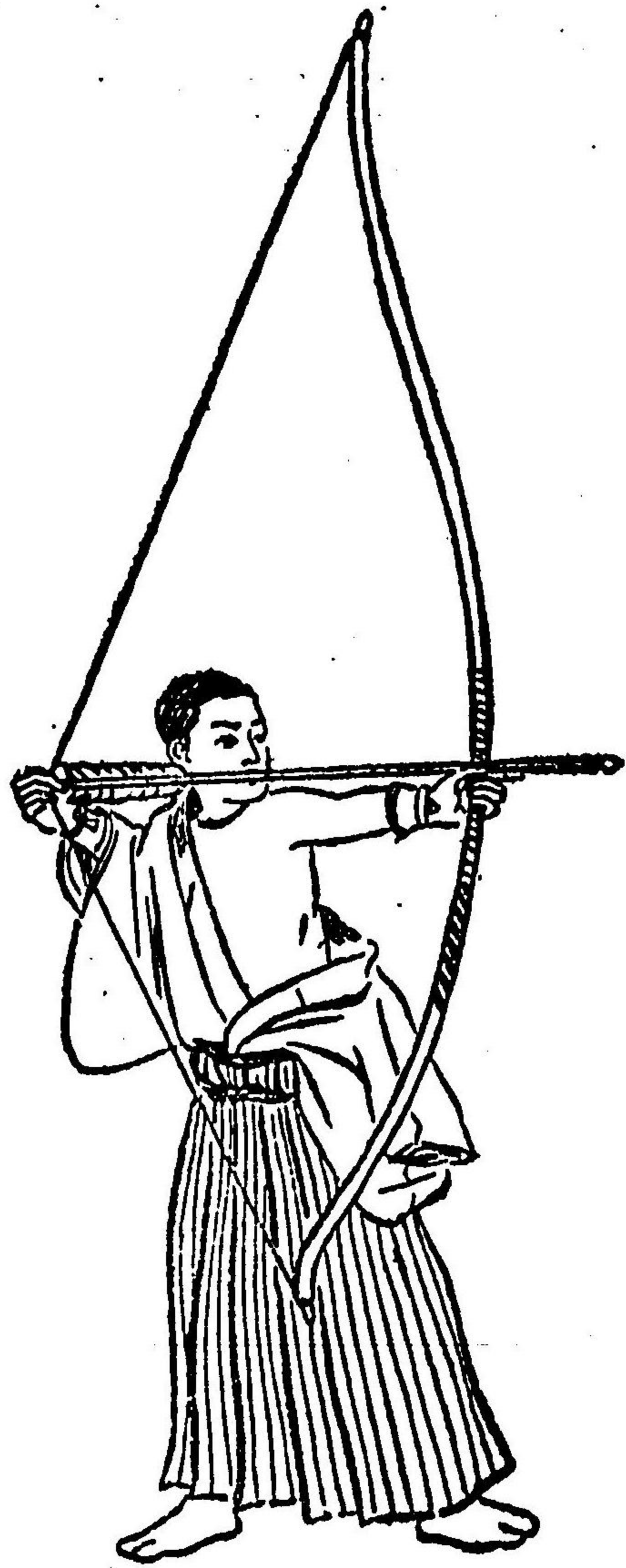
第十三章 引 取

弓構も濟み、打揚も終たならば、次ぎは引取に移つるべきは當然の順序である、依つて今茲には引取の事を説明する、引取はまた引分とも云ふ、兎に角弓を引絞る所作を謂ふのである。

偕て引取は勝手（茲をとりし右手）の小指を緊く締めるのを第一着手の必要條件とする、それからリザリと勝手を引取り、肱尻が適當の所に至つたならば、肱尻の力を押手の方へ移つし、腋下の筋を下よ

り眞直に延し乍ら、押手（左手）の拇指を堅く締む

第十圖 引 取



れば、肱尻より押手に移つた力は、中筋の働きによつて全く押手の拇指に集まるのである。

以上述べた如くに、弓を引取には、先づ勝手の小指を堅く締め、肱尻にて引取るのである、是れは全く自然の法則から出たもので、若し斯くの如くにせずして手首にて、弦を引かうとすれば、手首にのみ氣が集つて、自然の働が出来なくなるのである。然るに初學者のうちには、兎角に肱にて弦を引取らんとはせずして、無理無體に手首にのみ、力を集めて引かうと試みる、依つて手先が凝つて、精神が此手先にのみ固着する、そこで發射しても矢は的を逸れるようになる、深く注意すべきである。

第十四章 着眼

足踏みや胴造や、弓構、打揚、引取など、順を遂うて規則通りに済ますことが出来たならば、今度は當然的に向うて狙ひを定めねばならぬ、其が着眼である。着眼とは古書には物見と謂うて居るものである。物見とは顔の向け方及び眼の着け方を謂ふのであるが、今は解し易きを主として、此書には着眼なる文字を用ひることとしたのである。

第 十 一 圖 着 眼

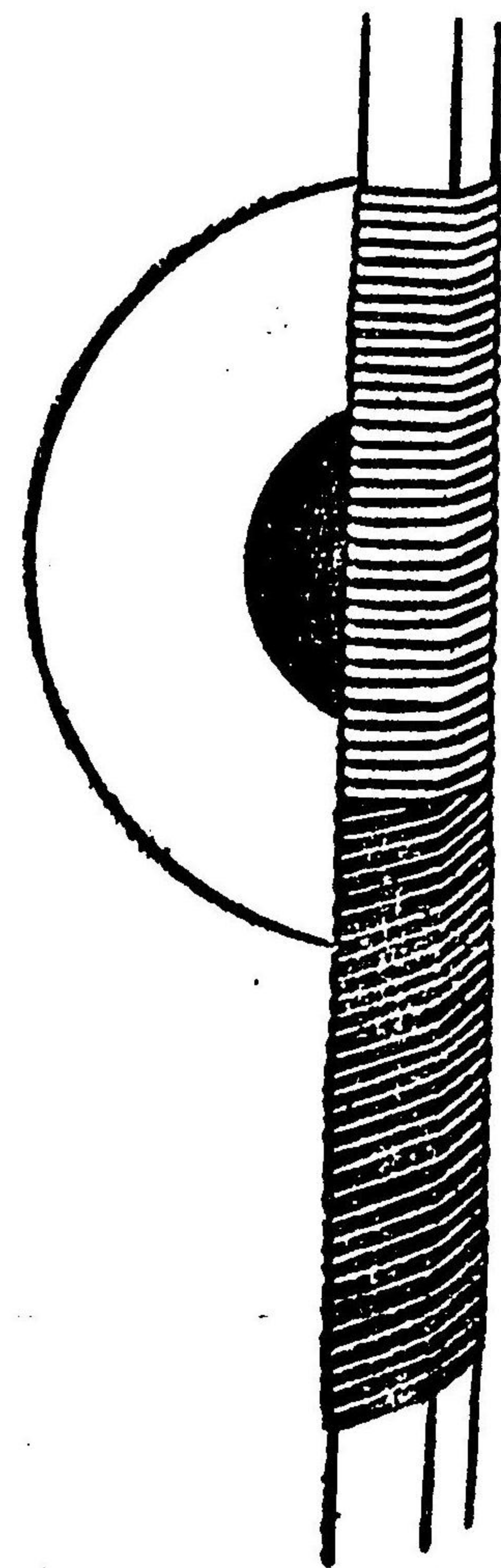


備て然らば、是の着眼は如何にすべきかと言ふ
 に第十一圖の如くの姿勢に弓矢を持ち、右眼のみを
 用ひて左眼は併せ用ひぬやうにする、そして的割と
 謂ふて第十二圖の如く、弓の左側を的の中心とキツ
 マリ相對するやうにする、之を弓の左側を的の中心
 に押し宛つると言ふ、そこで其の的の遠近は矢摺藤
 にて斟酌することが出来る。

かゝる時に體は、兩足を土臺として腰に据ゑて少
 しく前に臥し氣味にし、手に持った弓も亦それに準
 して前に臥す、そして矢を頬に付け、眞直に口の結
 び目に横たはるやうにする、其時左右の肩は平直で

勝手の肘は少しく下がり氣味となるのである。
 凡そ射術の萬の癖は、是の着眼に毫毛の違ひある
 によつて生ずる、眼睛に於ける極微なくるひも的場

第 二 十 二 圖 的 割



にゆくと一間なり一丈なりの違ひとなるので、特に
 慎重の態度をとらねばならぬのは、此の着眼のこと

である。

されば射法啓蒙にも
 眼法は餘念なきを善とす、的を認むること仇の如
 と云へり、夫は眼睛をこらして、二筋にならぬや
 うに小さき物をも大きく見る程に目をいからして
 見張る事なり、必竟的中りは精神の貫くを主と
 する事にて、まづ爰を射んと主意を立つること本
 なり、之を本として心の精神眼に發し、一身の力
 も精神も一つになりて、的に赴く事なりといへり
 誠なる哉、一身の精神皆目に萃まる、目の注ぐ所
 神必ず至つて、四體、百骸、筋力、精氣、俱に赴

くことあり、されば着眼は、纒の義なれども、輕忽にすべからず。と教へて居る、蓋し着眼を正しくせんと思はば、詮ずる所、心眼を開いて、先づ物の如何を洞察せねばならぬ、是れは中々至難のことであるが、一道に達した人は多く是の心眼の修練が出来あがつて居つたやうに見える。

看よかの獵師にして、其技の奥儀を極めた者は、所謂腰狙と稱して、獵銃を態々肩まで荷ひ上げず、殆んど腰で狙ひを定めて能く飛鳥を落とすではない乎、是れ熟練の結果、既に心に其の距離及び、彈道

の如何を洞察し得る餘裕が生じて居る爲である。

然るに初學者には、悲しひ哉、かゝる餘裕はないのみならず、着眼の事にのみ意を用ひれば、胴造りが粗かになるか、然らざれば足踏みが亂れて来るやうなことがある、是れは注意が萬遍なく行き届かずして一方に偏する爲である、詰り精神に滯ふる所が出来て行きつまる故である。

之の病癢を癒やすには、どうしたならば、宜いかと言ふに、無意識に足踏みはかくく、胴造りはかくく、法則に確とかなふやうになるまで、稽古に稽古を積ねばならぬのである。

第十五章 持 ち

持ちは保ちとも謂ふて、弓を引き絞つてのち、押手、勝手の關節を堅く締め、之を寸毫も動かさずに保ち的を狙ふて發射する迄の間を謂ふのである。然るに是れは後に説く所の發射即ち放れと共に弓術中最も肝要なる一つであつて、矢の的に中たると中たらざるは又此持ち如何による事あるのである。持ちは斯く射道に於て肝要なることなれば初學者は篤と注意して苟くも法に違ざらむことを努めねば

ならぬ、然らばか程に重要なる持とは、如何なる風になすべきかと云ふに、緊要なることは、押手勝手の肩臂平らかにして、所謂横一の姿勢をとるのである。然るに弓術の初學者は、百中の九十九までは、此横一の姿勢を保つことが出來ずして、勝手(右手は下り、押手肩(左手肩)は凸起するものが多い、かくては左右の肩臂は横一とはならず、従つて關節は確と喰ひ合はずしてグラグラと動揺するにより、矢の出づること一樣でなく、或る時は右に觸れ、また或る時は左に逸、若しくは上下に奔逸するのである。

依つて、斯くの如くに動搖するを避くる爲に、最
 初打揚の時に於て、勝手を押手より少し高からしめ
 又押手の肩を、カクリと落とす流派もある、之を左
 肩低落の法と云ふのである。
 打揚の時是の左肩低落の法を用ふるときは、持は
 動搖なく續けることか出来る、何んとなれば、初學
 のうちは、兎角に弦を引く段になると、右肩は低り
 易く、左肩は高まりかちに流るゝからである、依つ
 て左肩低落の法を以つて、其の初めに於て之れを反
 對ならしめ、左肩を低落氣味にさするのである、然
 かするときは、是の持の段になりて、左肩のさがる

こそなく、能く横一の姿勢を保ち得るのである。
 かの射法啓蒙に
 臂にて弓を引かず、肩にて引べし、臂にて引くは
 筋の力なり、肩にて引くは骨の力とあれば、骨合
 筋道の交和を考へて、押手の二の腕、勝手の臂尻
 につよく力を入れて、兩方均しく役所くの齊ふ
 間が持術なり、猥りに久しく抱るにあらず、又餘
 り永く保過ぎたるは死物なり、脱がらの弓になり
 ては悪し、早きは勿論あし。(中略)
 兎角弓を引満ると思ふと、必ず緩むものなり、故
 に引き絞りに引き絞りに、少しもくつろげ間敷。(中略)

勝手の肩は高く聳えたるまゝにて、後へくと締
 め下ぐるときは、兩肩のかひから骨（肩胛骨）
 と付合ひ、胸前肉開、背後肉緊たる姿なり。
 と言ふて能く持満の姿勢を説明して居る。

第十六章 放 れ

放れは、また離れとも發れとも謂ふて矢發射する
 事を云ふのである、故に的中するとせざるとは是の
 放れの如何によつて決定するので、弓術中の最大眼
 目である、がの胴造や打揚や引取などのことを諄々
 と説いたのも、詮ずる所は此の放れをして完全なら
 しめたいばかりであつたのである。
 それかあらぬか、古來の弓術書中には各其の秘術
 を盡くして尤も力を茲に致して居る、其の結果各流

派の説く所が、區々として一定したるものなく、或る流によれば、此放れば、熟した柿の落つるやうにせよと云ひ、又或る流によれば、放れといふは放すにあらず放るゝにあらず、總體動かずして、掛と弦と放るゝを云ふと論じ、又或る派によれば唯だ、そつと放つと説く、そこで歌にも種々ある。

はなれとは、放るゝときに、放されて

しらずしらずに、ゆくものと知れ

發すとも、はなさるゝとも、思ふなよ、

弦にかけひき、はなされて射よ、

矢を掛けて、引しほるゝは、覺ゆれと

はなつときには、無念無想よ

射道も是の無念無想の天地に往來して、自己に發

射の意の更に動くことなくして、不知不識の裡に、

矢の放れて的を射るに到らば、至極の妙境に達した

ものであるが、是れは修業に修業を重ねた上のこと

初學者には、先づ放つ念慮が浮ねばならぬ。

然らば如何にして放つかと言ふに、そつと放つの

である、されど此處の呼吸も亦至難のことで、餘り

輕きに失するときは、矢の出づるに勢力なくして中

途で矢は落ちて仕舞ふ、又之を防がんとて今度は、

餘りに力を入るれば、姿勢が動揺して來る、従つて

放つた矢も的を逸れて仕舞ふ。

第十三圖 發射



故に放れの妙は、到底言葉を以て説明しきれぬのである、強ひて言へば、輕きに似て輕からず、力を

用ひて力を用ひざるかのやうに、偏へに手と弓との呼吸によりて、妙味を悟らなければならぬ。

今是の放れを、形の上から論じて見れば、先づ第一に押手の拇指の根から仕掛け、其時をたがはず殆んど同時に、勝手の拇指を開らき敏速に其掛り居る弦を脱すのである、而かも其弦音の如何は弓術の巧拙を談るものである。

最後に一言すべきことは、彼の弓回りの事である弓回りとは發射したる後で弓がピンと撥ね返へることを謂ふのであるが、此事たるや、畢竟自然に出来るもので、決して強ひて摸倣すべきものでないの

ある。
 然るに初學者は、弓回りを強ひて爲さんと努むる爲に殊更に、拳上下左右に動かさし、甚だしきに至つては其の動搖によつて的を逸る矢の距離目算して、的を狙はずして他を狙ひ以て偶然にも中らむことを期し、且つ弓回りも出來ると心得る者がある、かゝる馬鹿らしき所作は決して爲すまじきものなるを切に初學者に戒め以つて此の放れの章に筆を擱く。

第十七章 結 論

余は此教範に於て、興味裕なる射道を論じ、章を重ねること十六回、紙を數ふること百餘頁にして辛うじて言はんと欲せし所のもの、幾分を述べ得たるを喜ぶ者である、思ふに讀者諸君のうちには、此書が在來の弓術書と多少趣を異にするところあるに氣付き、其處に著者の努力も潜み居るを買ひ呉れし人々は多くあらむ、さすれば余の努力も強ちに的なきに矢を放らしにはあらで、多少の手筈へはありしも

のと認めねばならぬのであるが、翻つて世間一般の射道に關する妄評に耳傾くるときには、多くの辯解の辭を要するを余は悲しむのである、是れ余が勞を惜むの故ではなくて、射道が斯くも謬り認められたるかを悲しむ爲である。

事情は斯くの如き有様に迄進みつゝあるものとせば射道の爲に些か氣を吐くは、是れ斯道に従事する者の當に爲すべき義務ではあるまいか。

今少しく路傍の射を議する人の説を聞かば、或る人は曰く、射は右手にて弦を引くなれば、右手のみ異狀の發達を爲して運動法としては、何等の價値な

しと、是れ恐らくは射道を知らぬ人の言であらう、何んとなれば、弓は右手のみにて弦を引くも決して充分には引き得るものでなく、左手も同時に弓を押ねばならぬからである、して見れば右手のみを働かすが射なりと見たる者は、是れ射道を正解したものととは言へぬのである、然るに一犬虚に吠えて萬犬實を傳ふると言ふ諺の如く、世人の多くが、斯る愚論に賛同し之を道に聽き塗に説くに至つては、獨り弓矢の徳の蔽はれたるのみならず、聖賢の徳も亦均しく晦蒙になりついたのを嘆つるより外はないのである。

夫れ世上には完きもの一つもあることなし、若し論者の筆法を以つて世の武術を論じて見るならば、何れのものもが果して完全であらうか、柔術の無茶苦茶に七轉し八倒することが、老若男女を問はず強ひて弊害がないであらう乎、劍術の無性矢鱈に打叩き、押突くことが、所在職業の人に強ひて弊害がないであらう乎。

よしや其道に従事する人が百萬の美辭を駢べて辯疏にたとめたとして、真理の到底曲げ得ざる以上は、我田引水の誹は免かれ得ないのである。

かく観してゆくなれば武術家の唯我獨尊論には餘

り確たる論據もなく従つて弓術を貶するにも徹底しない所が多いのである。

物に偏すれば中正を得ることは六ヶ敷、弓術とて決して運動法として他の武術に劣るものでない。

否寧ろ其の普遍的なる點に於ては、恐らく他に匹儔すべきものがないであらう。

見よ、少年が弓を射るに何の不自由がある、老人が弓を射るに何の不自由がある、女子が弓を引くに何んの弊害がある、弓は農夫に適しないか、弓は商人に適しない乎、弓は職工に適しないか、弓は頭腦を働かす學者文人に弊害あるか。

かく連發せられたる疑問に弓術は毫も躊躇する所なく答へ得るの性質を有して居るとせば、弓術は運動法として、今後末永く生命あるものたる事が知れよう。

然れども單に運動の點より見て、弓術を揚げて他の武術を貶さんとするは余の欲しないところである。抑、武術の各種は柔術にあれ、劍術にあれ各相異なつた使命を帯びて生れ出たるものなれば、利害得失に於ても自ら相一致することは不可能であるのである。

さるを古來の武術家の偏僻なる眼は我術のみ尊し

とせざれば已まざる風を馴致したと言ふことは、如何にも武術の精神に悖つたことではあるまい乎。

世の武術家が相胥るて、術の利害、術の巧拙を論ずることのみ拘はつて、其の本來の目的たる武其者を忘れたとすれば是れ由々數大事である。

「わけ登る麓の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな」の歌の如く、弓術と云ひ柔術と云ひ劍術と云ひ道こそ異なれ、同じ武を目的とするものなれば、運動法上の論争を事とせずして、精神上の修養如何と云ふことも大に考慮せんければならぬことであらう。

然らば射道は如何なる方面に立つて精神の修養を教ふるものなるかとの疑問が起るであらう、然るに射道の精神上に及ぼす効果の一般は前既に述べたるを以て茲には深く論ずることを止め、射道固有の性質より來たれる精神上の感化に就て一言すること、しよう。

夫れ射は吾人の言ふ迄もなく、勇壯にして而も殺伐でなく、典雅にして而も優柔でなく、威あるも決して猛からざる諸徳を有して居る、是れ射が君子の徳を吾人に教ふるものでないか。

又射は相手なくして爲し得るものなれば、強ひて

弓 術 教 範 大 尾

人に勝たんとする卑しき心に遠ざかるを得るのである、而も自ら樂しむに於て不都合はなく、衆と俱に樂しむに於ても亦不都合はないのである、君子は人と争はずと言ふことあり、果然射は是に於ても亦吾人に君子の徳を教ふるものである。

聞け如何に弓弦の音の勇壯にして典雅なるよ。

見よ如何に弓射る人の威儀を装うて猛からざるよ。些か弓術の爲に辯じて結論とす。

明治四十四年十月廿二日印刷
明治四十四年十月廿五日發行

版權
所有

著作者

山本

晉

發行人

野口正八郎

印刷人

岡次郎

印刷所

三田印刷所

東京市芝區三田四國町二番地

發行所

東京市麻布本村町

帝國尙武會

電話芝一七九六
振替東京一九五七八

正價金三十五錢

▲**自宅獨習法** 柔術の通信教授に多年の経験をもつる完全無缺な帝國尚武會の考案を施したる獨習法は **完全無缺**なり

▲**教授書** 新に大改良を加えて **素人**も容易にこれ**妙技**を得べし

▲**極意秘訣** は盡く會員に開放し本會獨特の **大著奧秘皆傳書** を附す

會則内容
無代進呈

實地柔術極意速成會員募集

▲**會費** としは當初一回入會費を納むれば足る月々の費は **不要**

▲**本會會員**は永久に本會の**通信指導**を受け得るなり

▲**本會會員**は隨時 本會道場にて **師範の指導**を受け得

電話一七九六
帝國尚武會
東京一九五七八

當代文士
一人一境

現代青年 **作文規範**

本クローネ上製
金文字入優美
正價金六十四錢
郵税金六錢

者	筆	執	者
長 塚 節	岩 野 泡 鳴	永 井 荷 風	武 林 無 想 庵
小 川 未 明	有 磯 逸 郎	小 山 田 薫	河 井 醉 茗
吉 江 孤 雁	長 谷 川 二 葉 亭	大 町 桂 月	岡 本 松 濱
小 林 薩 吉	小 林 愛 雄	秋 田 雨 雀	窪 田 堂 穂
高 村 光 太 郎	徳 田 秋 江	岡 本 登 華	上 司 小 劔
澁 川 玄 耳	水 野 葉 舟	三 津 木 春 影	與 謝 野 晶 子
平 福 百 穂	藤 田 泣 望	三 木 露 風	大 塚 楠 緒 子
月 川 秋 骨	太 田 水 穂	小 島 島 水	薄 田 斬 雲
			昇 昭 夢

發行所 東京麻布 **帝國尚武會出版部**
電話芝一七九六
東京一九五七八

帝國尙武會編纂

處世之活法

三六版クローヌ金文字入美本
正價金五十錢 送料金六錢

森 先生著

馬術教範

四六版クローヌ金文字入美本
正價金四十五錢 送料金四錢

武部白山先生著

劍術教範

四六版クローヌ金文字入美本
正價金六十五錢全國無送料

河合鸞哦先生著

劍舞術教範

四六版製本高尙優美寫真圖解
正價金五十五錢全國無送料

深井先生著

水泳術教範

四六版クローヌ金文字入美本
正價金三十錢 送料金四錢

帝國尙武會編纂

家庭百科講義錄

每月一回一ヶ月年完結
會費一ヶ月金二十錢

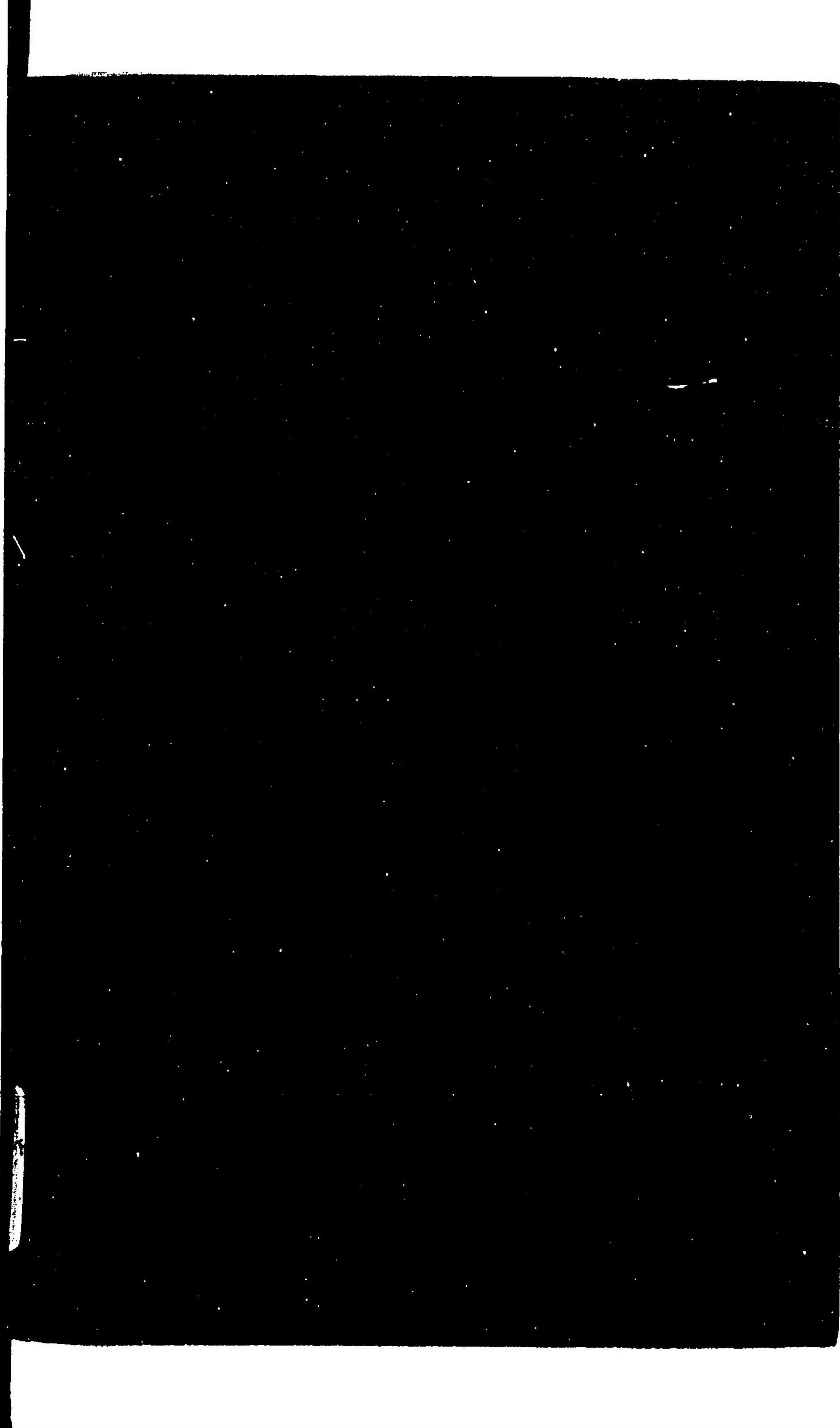
發行所

東京麻布

帝國尙武會出版部

電話芝一七九六
振替東京一九五七八

268
468



075168-000-0

特23-158

弓術教範

山本 晋/著

M44

CEM-0069

